

新型コロナウイルス感染症とスポーツへの影響について

佃 文子¹⁾

Personal views on the impact of the 2020 Pandemic on sport

Fumiko TSUKUDA

Key words : COVID-19, sport, TOKYO 2020

キーワード：新型コロナウイルス，スポーツ学，東京オリンピック・パラリンピック大会

はじめに

このエッセイの目的は、2000年の新型コロナウイルス対応行動を通じて変化した自身の価値観について整理することで、現時点における自身のスポーツの価値観（これからのスポーツへの関わりと自分の働き甲斐）についてまとめることにある。

2020年2月頃から、新型コロナウイルスの感染拡大によって、私達の生活は大きく変化した。全ての社会生活において先の見通しを立てることが難しくなり、これほどにも世界規模の問題となった出来事は初めてである。スポーツの教育機関に従事している私にとっても、これまで通りのスポーツ活動や教育活動が出来なくなり、考え方や生活スタイル、仕事の方法まで変更せざるを得ない一年だった。私の専門はスポーツ医学・トレーニング科学で、スポーツ活動を行う人々の安全面から指導・支援することが具体的な実践活動である。そのため、当初の課題はスポーツ活動における安全管理として活動に伴う感染リスクの問題や、感染が疑われる場合の救護活動等と思われた。しかし問題は大きく、多くのスポーツ活動の中止から、スポーツの存在価値についても考えるきっかけになった。

コロナ禍で考えたこと

2020年の1年間で自身が考えたり考えを改めたことは4つある。一つ目は、社会的混乱と文化的価値、二つ目は「deportare」（デポルターレ）、三つ目は日常業務・教育活動の変更、四つ目は東京オリンピック・パラリンピック大会の開催についてである。

一つ目の社会的混乱と文化的価値については、緊急事態宣言の発令下では命を守る行動が優先されるため、スポーツなどの文化的価値の認識が出来なくなることを理解したことである。外出の自粛や社会行動の規制が行われた際には、何事にも生きのびるための行動が優先され、マスク不足や一部の食材が手に入りにくくなる等の社会的混乱も生じた。これまで私は、スポーツには「人を元気にする力がある」と盲目的に信じていたが、社会の混乱下では全く役に立たないと思いなおした。またスポーツ活動はコミュニティの形成にも貢献すると信じていたが、感染リスクのためにできなくなり、この時私はあっさりと「スポーツって無力だ」と考えてしまった。スポーツなどの文化的活動の基盤として、安定した社会や日常生活は重要であり、これまで平和で安定した環境でスポーツが出来ていたことに改めて気づかされた。

二つ目の「deportare」（デポルターレ）に

1) スポーツ学部

については、私自身がスポーツの原点に触れたことを示す。令和2年4月の緊急事態宣言後、外出自粛要請等により身体の活動が抑えられた時に、自分自身に身体活動欲求がわいてきた。メディアを使った広報等に促進された感もあるが、身体の不活動や社会情勢へのストレス対策として、私もテレビの体操番組やYouTubeによるYOGA動画、ウォーキング、サイクリング等のスポーツに自然に取り組んだ。スポーツの語源はラテン語の物理的、空間的な運搬、移動、転換という意味をもつ「deportare」に由来するといわれており（阿部，2009）、古代フランス語では、内面的・精神的な次元での移動・転換を原理とする喜びや楽しみを内包した表現に受け継がれ、13-14世紀には「楽しみや気分転換」、16世紀には「気晴らし、娯楽」へと概念が変わっていったとされている（中村ほか，2015）。一つ目のスポーツの価値観が薄くなった後に、自分がスポーツを楽しんでいることに気が付き、嬉しかったことや少しの安堵を感じるようになったことを記憶している。これまでレジャーやレクリエーション等の広義のスポーツの意味を理解していたつもりではあるが、身をもってスポーツの語源の意味と身体活動の重要性について学びなおし、自分も実践できたように思う。

三つ目は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、日常業務や教育活動の方法が変更されたことに伴いストレスが増大したことである。これまでは、スポーツの医科学に関する知見と経験値を基に、スポーツの指導と支援に関わってきた。しかし新型コロナウイルスへの対応のため、これらの方法に大きく制約がかかるようになり、シラバスなど授業設計を変更せざるをえなくなった。また遠隔授業システムが導入されたので、新たなシステム操作に慣れていく必要があった。突然目の前に突き付けられた業務方法の変更で、毎日コンピューターの画面とにらめっこをしながら新たな授業コンテンツ作成に格闘した。大

変ではあったが、面白い取り組みに挑戦できたこともあった。毎年演習形式で取り組んでいた救急処置法の授業では、従前のペアやグループによる実践型授業が出来ず工夫が必要だった。この授業は大学1年生に対する授業であったため、1年生の大学授業への適応についての懸念もあったが、近年のSNSやスマートフォンの取り扱いに慣れた学生達は、動画による実践行動の課題提出にも対応して、例年とは異なる形ではあるが実践的授業として取り組むことが出来た。これらの授業への取り組みは、同僚教員や非常勤講師と連携し試行錯誤の連続だったが、楽しい授業づくりであった。この様に新しい遠隔授業の仕組みの導入は、刺激のかつ創造的で、なおかつIT化を通して仕事の効率化を期待できた面もあった。しかし、作業に対する試行錯誤や授業コンテンツの作成作業、評価時間が想像以上に膨大で、さらにそのストレスが授業のたびに繰り返されることで、徐々に疲弊感が増大していった。また感染拡大の状況が変化すると、その都度新しいガイドラインを確認して対応方法を検討し決定していく作業も多く、変化についていくエネルギーも相当求められたと感じた。一年を通じて新たな教育システムで学んだ学生たちにはもちろんだが、授業コンテンツを作り続けた自分に対しても「よくやった」とねぎらいたいと思う。一方で遠隔授業の成果について、私の中で釈然としないことがある。なぜなら、私たちの大学で取り扱う「スポーツ学」は机上で学べる科学的根拠や理論もあるが、トップパフォーマンスを体現できてこそ、また体現できるように不断の努力で取り組む実践が伴ってこそ価値や評価が高まると思う。学生自身の実力と他者アスリートのリアルな体現・実践のギャップを通じて、他者や自己を理解する力が伸びることも期待できるだろう。しかし感染拡大によって、このような実践的取り組みが大きく規制されてしまい、学生たちの学びの場がコンピューターやスマートフォン

の画面上に大きくシフトしてしまった。画面上では他者への働きかけや返ってくる反応にはゆがみが生じ、リアルな評価を得ることが困難である。また雪上実習等の実習の場、学事・式典など節目の式典の開催もできなくなり、学生たちが集まって学びの時間を共有し、協働し、見識を高め互いに認め合う場所や機会も失われてしまった。私が、遠隔授業で四苦八苦して授業をやり切っても、十分な達成感を得ることができないのは、この実際の体現や実践による失敗や工夫、協働による達成感が乏しい中で、「学生たちが本当にスポーツを学んでいるのか」といった授業効果に対する疑問や不安が残っているからだと思われる。遠隔授業の効果に関する経験が今は少ないことは仕方のないことだが、今後はスポーツ学における画面上の仮想的知識と思考の構築と実体験のギャップ経験の有無について、学習成果への影響について検証していく必要があると感じている。

四つ目は、東京オリンピック・パラリンピック大会（以後、東京オリパラと略す）の開催が1年延期、さらに現在も開催についての見通しが不安定となり、大会の開催に対する気持ちや自分自身でどう整理すべきかわからなくなってしまうことである。私は大会期間中は二つの会場のボランティア・スタッフを務めることになっていた。大会を企画する側の立場としては「東京オリパラが成功裏に進む」よう願っている。また東京オリパラの開催は「国内のスポーツの様々な取り組みが大きく前進する契機」だと考えて期待している。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大とそれに対応している医療関係者へ多大な負担をかけている現状を考えると、「本当に開催しているのか？このような状況でアスリートにも観客にも、開催スタッフにも多大な制約と負担をかけて開催して一体誰のためになるのだろうか？」と疑問を持ってしまった。たとえ厳格な管理体制のもとに開催したとしても、「開催してよかったと思ってもらえる大会に

なるのか？真にスポーツの価値を高めることができる大会になるのか？単なるスポーツ関係者のエゴを通したと思われぬのか？」と疑念がわき、常に先の期待との葛藤が続いている。今後も、ワクチンの有効性や普及の問題、感染の状況、世界の社会情勢等様々な要素が絡み、開催に向けた見通しは簡単につきそうもない。堂々巡りの思考を繰り返しているが、葛藤の中で到達するのは「自分の役割に徹する」ことである。私には、これまでの五輪経験を通して「期間中に自分に与えられた役割を全うすることが一つの仕事の成果につながる」という信念が出来た。よって開催してもされなくても、開催までの準備作業は次の成果にもつながると信じたい。東京オリパラ大会の開催にむけて模索が続いている限り、葛藤しながらも私の役割でしかできない仕事は何かを考え、求められるタスクは全うしたいと思っている。

まとめ

この時代を生きる私たちにとって、新型コロナウイルスの感染拡大は、人生の中で大きな出来事であることは間違いない。これまでスポーツに傾注しスポーツを基に自己形成してきた私にとって、スポーツ活動の他者交流の面が閉ざされ、その部分への価値がそがれてしまっただけで、一次的にだがこれまでの自分が信じた価値が全て無になったようにも感じてしまい、精神的にも非常に混乱した。しかしスポーツには、「身体活動として精神的にも身体的にも重要であること」、「身体活動を行うことや身体活動の水準が高まることはいつまでたっても楽しいこと」、「身体活動を通じて他者を理解し相手を尊敬できること」、「協働性の身体活動を通じて社会性が高まること」、「身体活動を通じて健康を維持することが出来ること」、等が「社会に貢献できるスポーツの文化的価値」と考えることが出来た。このような基本的なスポーツの文化的価値を再認識することで、混乱した社会情勢の

中でも「スポーツがなくなることはない」と確信することもできた。今後は感染症に対応した「スポーツを支える人や仕組み」が求められることになるだろう。自分自身がこの一年で感じたスポーツのとらえ方・価値観の変化にもあてはめることが出来る「不易流行」という言葉がある。重要なものは不易（不変の真理、ずっと変わらないもの）で、それらを継続して行くためにも「流行（変化、新たな進展）」が必要であるという意味である。新型コロナウイルスの影響がいつどのような形で終息するか、東京オリパラ大会は無事に終わるのか、本当にわからない。だからこそ自分が信じるべきスポーツの新たな進化に、私自身も適応していきたいと思っている。

引用文献

- 阿部生雄（2009）近代スポーツマンシップの誕生と成長。筑波大学出版会：茨城，p.5
- 中村敏夫，高橋健夫，寒川恒夫，友添秀則（2015）21世紀スポーツ大辞典。大修館書店：東京，p.5